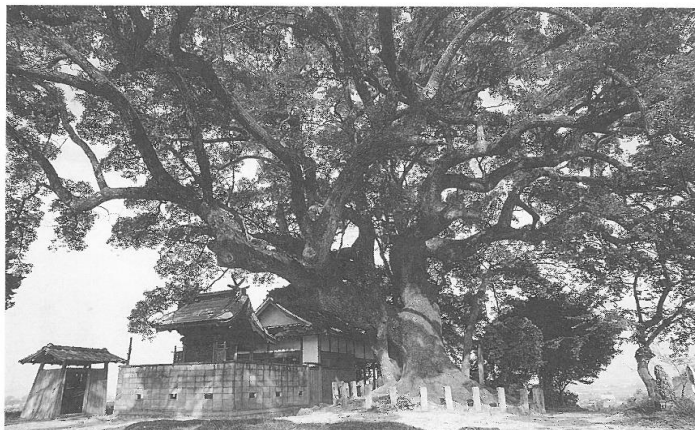
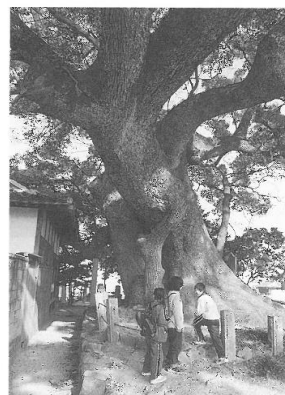




樹冠は神域と世俗を区切るかのように社殿を覆っている。



幹周は約9.3m。

数百年間にはどれほど多くの人がこの木を見つめたことだろう。ときには祈りを託し、悲しみを訴え、喜びを告げて、この木に對峙したこともあっただろう。遠い地に離れた人にとっても、故郷のランドマークとしていつまでも色あせることはない。日本人は古来から、巨木だけでなく、巨岩・滝・山など並外れた自然物に神の存在を感じ敬ってきた。しかし巨木への畏敬は単に自然物としての巨大さによるものではなく、長い年月を生き抜いた生命体であることに由来するものではないだろうか。

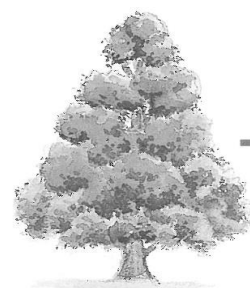
まつい・ひろみつ 一九五二年、福山市生まれ。松山東雲短期大学教授。専門は植物社会学、環境教育。著書「えひめの人里草図鑑」「えひめの薬草図鑑」等。現在、執筆中の「四国樹木図鑑（仮題）」が脱稿すれば、当の頃は筆を休めて、野山を走り回る本来の自分に戻りたい。



半球形の樹姿は四国一とも言われる。



田圃の中に孤立して聳えるクスノキ。背後に東予市臨海工業地帯が見える。



木と人間 7

天満神社のクスノキ

松山東雲短期大学

松井 宏光

Hiromitsu Matsui

西条市坂元の天満神社に幹周九・三mのクスノキの巨木がある。枝は四方に伸び、枝先は地面近くまで下がり、たった一本で森のように境内を覆っている。その姿はまるで地面のほころびから大地のエネルギーが枝葉となって湧き出したかのように力強い。間近で見上げると生命力に圧倒されて息苦しくなる。

この木の樹齢は定かでないが、過去に伐採されたクスノキの年輪測定値から推定すると樹齢は約九四〇年となる。つまりこの木は平安の時代に芽生え、江戸時代にはすでに大木となり、以来、現在までこの地に聳えていたのだ。

過去には幾度も日照りや病虫害で樹勢が弱ったこともあったであろう。根張りや日陰は生長するほどに隣接する田畑に被害を広げる。大風に飛ばされた枝は時として屋根を傷める。落葉の掃除も大変な作業だ。そのため伐採を求められたこともあったであろう。しかし、住民は現在までこの木を守りつづけた。長い年月を生き続けた木は、地域の人々にとってはいきわめて重要な存在であるに違いない。

県内には数百年の樹齢を持つ巨木が各地に残っている。環境庁が一九八八年に実施した全国巨木調査では愛媛県内で約一、三〇〇本の木が報告されているが、調査時にすでに衰弱しているものや枯死寸前だったものが少なくなかった。本年度、それらの木について追跡調査が行われているが、何本かはこの十二年間に命を終えているはずだ。

はたして私たちは衰弱しつつある巨木に十分な看護が出来ただろうか、枯死した巨木の最後を見届けたのだろうか。巨木を見るとき、その大きさに目が奪われて、環境のストレスに耐えながら懸命に生き続けている生命体だという認識を失いがちだ。